

田付茉莉子 著
『五代友厚』
—富国強兵は「地球上の道理」—

山田 雄久

近畿大学教授

本書は日本経済史・経営史の観点に基づき、大阪の企業家である五代友厚が革新的事業を手掛けるに至った経緯と、彼の事業活動の具体的内容について明らかにした好著である。

五代友厚に関する評伝としては、五代家による五代龍作『五代友厚伝』（1933年刊）や、『近代之偉人 故五代友厚伝』（1914年刊）、『五代友厚秘史』（1960年刊）など、「大阪の大恩人」と呼ばれた五代を取り上げた著作が多く刊行されている。また、五代友厚の企業者活動に関する研究としては、日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』全4巻（東洋経済新報社、1971-74年）のほか、宮本又次『五代友厚伝』（有斐閣、1980年）、田付茉莉子「工業化のリーダーシップ—五代友厚—」（由井常彦編『日本経営史講座 2 工業化と企業者活動』日本経済新聞社、1976年）など、これまで数多くの研究成果が公にされてきた。

本書では、五代家文書をはじめとする五代友厚に関する一次史料をもとに、革新的経営をもたらした要因とその原動力について克明な紹介がなされている。「序章 幕末薩摩藩と五代友厚」では、第11代藩主島津斉彬による富国強兵策の下で、近代国家をいち早く築いた欧米諸国の技術や制度を学ぶべく、五代が長崎海軍伝習所に遊学した経験について着目する。長崎では松木弘安（寺島宗則）や勝麟太郎（勝海舟）などの海軍伝習所で学んだ学友や、佐賀藩の中牟田倉之助・大隈八太郎（大隈重信）、土佐藩

の後藤象二郎・坂本龍馬といった幕末維新期に活躍する人物との交流を通じて、日本が近代国家となる上で西洋知識の導入が不可欠の条件となることを認識したことを強調する。

「第1章 西欧近代に学ぶ」は、長崎時代に藩命を受けて1862（文久2）年に上海渡航を果たし、上海での市場調査を通じて貿易の利益が多であることを五代が認識したこと、薩英戦争では薩摩藩を砲撃したイギリス艦隊が五代と松木（寺島）を拉致し、横浜で釈放された後に、長崎で潜伏する五代が十カ条の意見書を提出したことを指摘している。グラバーとの交流を通じて、五代は留学生派遣、軍艦・大砲・小銃などの兵器購入、ジャガード機・鋌山掘削機械・反射炉などの設備導入や造船技術者の雇い入れなどを上申書で提言するに至り、1865（元治2）年にはグラバー商会の仲介で、15名の薩摩藩留学生がイギリスに渡った。その際には五代・松木（寺島）のほか、森有礼や畠山義成・吉田清成など、維新期に外交や教育の世界で活躍する人材が欧米の制度について学び、帰国している。

「第2章 日本の近代化に向けて」では、渡英時に五代が新納刑部・堀孝之とともにマンチェスターやバーミンガムを訪問し、ブラット社で紡績機械を購入するなど近代技術の導入に着目したことに着目する。ロンドンから送付した「十八箇条の建言」では、会社組織による商社の設置、1867（慶応3）年のパリ万国博への参

加などを提言した。幕府と薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ独立に万博出品を行うよう指摘するなど、五代は具体的な指針を藩に提示したのであり、同年には国内初の洋式紡績工場となる鹿児島紡績所が誕生している。

幕末期の長崎における活動を受けて、「第3章 明治政府に出仕」では五代が小松帯刀や寺島とともに外国事務局判事となり、大阪居留地を整備するとともに「大阪開港規則」の草案作成と各国領事との交渉にあたったこと、1868（明治元）年には造幣寮を大阪に設置し、1871年に本格的な銀貨鑄造が始まったことを紹介する。1869年に五代は会計官判事となり横浜に転動したが、通商司政策の下で通商会社を設立して貿易を奨励し、外国との通貨問題を解決するため奔走している。まもなくして五代は政府の官職を辞職し、大阪の地で新たな事業に着手した。民間人となった五代は、近代日本が進むべき道を率先して歩もうと考えたに違いない。官業では十分成し遂げられない事業を開始することによって、自ら近代企業を設立し近代産業を育成する役割を演じたのである。

続く「第4章 実業界でのスタート」では、金銀分析所を設立して益田孝が経営にあたったこと（1874年に益田は井上馨とともに先取会社を大阪に設立）、『和訳英辞書』（薩摩辞書）を刊行して、薩摩藩士の高橋新吉・前田献吉・前田正名の留学資金を獲得したことなどを指摘する。長崎で活躍したフルベッキの協力もあり、薩摩辞書が使いやすい辞書に仕上がったと小松が五代宛の書状で記している。さらに、五代が1871年に『大阪府日報』を創刊し、その後『大阪日報』や『大阪新報』の発刊に関与するなど、新聞事業に早くから着目し、西欧の制度に基づく新規ビジネスとして取り組んだ事実について明らかにしている。

「第5章 鉱山業の展開」では、1871年に取得した奈良県天和銅山を皮切りに鉱山業へと多角化を進め、1873年に弘成館を設立したこと、管理部門と鉱山部門を分離しながら多数の鉱山を管轄した弘成館の経営組織について検証して

いる。鉱山業に着手した小野組の支援を受けて、五代は半田銀山の経営に乗り出し、西洋からの技術導入を通じて自らの事業を拡大した事実は注目に値する。同様の近代的事業として、製藍業の近代化を目指した五代は朝陽館を1876年に設立し、所有する鉱山を抵当に入れて政府準備金の貸付を受けた。「第6章 製藍業の近代化と失敗」では、朝陽館が中国方面への精製藍輸出に乗り出し、販路開拓に努力したものの経営面で採算が取れなかった事実とその要因について分析している。維新时期に五代が手がけた新規事業は、日本の産業を発展させる上で重要な契機となった。結果として経営的には先駆的な試みとなったが、西欧諸国との市場競争を通じて日本の近代産業を育成しようとする意欲に満ち溢れた事業であったと考えられよう。

大阪で活躍する企業家たちに多大な影響を与えた五代は、大阪製銅会社の設立、広業商会を通じた北海道海産物の中国向け輸出、関西貿易社の創立など、大阪商人との共同事業へと乗り出した。「第7章 その他事業への出資」では官有物払い下げ事件の顛末に加えて、関西貿易社が本業として生糸の売り込み事業を考えていた重要な事実について指摘している。さらに五代は東京馬車鉄道への出資（1880年）や神戸栈橋会社の設立（1884年開業）、共同運輸会社・阪堺鉄道会社設立時の積極的関与などを通じて、近代企業の設立をリードする役割を担った。

「第8章 商法会議所と財界活動」では小野組家政改革への関与、征台論に反対し下野した木戸孝允をめぐる大阪会議の開催など、大久保利通との密接な関係や新政府に関わる政策面での尽力について検証し、堂島米商会所設立と米相場への関与について言及している。続いて住友や鴻池・山口・三井などの豪商とともに大阪株式取引所を開設した五代は、1878年に大阪商法会議所を設立し、維新時の御用金負担、銀目廃止、蔵屋敷接收、株仲間解散・藩債処分などの影響を受けて衰退しつつあった大阪経済の秩序回復を目指した。商業仲間規則や商業手形流通、条約改正などの請願・提言を積極的に行う

ことで大阪経済の再建を可能にただけでなく、大阪商業講習所の設立（大阪市立大学の前身校となる市立大阪高等商業学校の誕生へとつながる）による人材育成や、米納論を通じた米価騰貴抑制、輸入代替策を通じた商工業の振興などの提言を通じて、五代は工業化を可能にするための斬新なビジョンを次々と提示した事実が明らかにされている。

「終章 五代友厚の生涯、果たした役割」では、薩摩藩出身者である小松帯刀、高崎正風、中井弘や、長崎でのグラバー、永見伝三郎、堀孝之、岩瀬公圃との交流、ベルギー出身のモンブラン伯爵や薩摩藩文勲派桂久武、大久保利通、黒田清隆、税所篤、松方正義、川崎正蔵との関係、田中市兵衛、広瀬宰平、伊庭貞剛、藤田伝三郎など大阪実業界の人脈について指摘している。戦前期に日本を代表する工業都市へと成長を遂げた大阪の経済界を組織し、製造業の育成を通じて国際競争力の強化を目指すイノベーターとして、著者である田付氏は五代の企業者精神を高く評価している。

五代が大阪で手掛けた事業の多くは、明治維新という時代の状況下で十分に成果を上げたとは言いが、先んじて近代工業の経営に着手し、近代大阪の発展を導く上で重要な役割を演じた事実は、時代の大きな変化を迎える今日において我々に多くの示唆を与えているように思われる。大隈重信は『近代之偉人 故五代友厚伝』の序文で、「時期がまだ早かった為に十分其の志を成す事が出来なかったが、若し氏をして猶ほ長く存し、日清日露両戦役前後に活動せしめたならば、必ずや巨富を成したに相違あるまい」と述べている。後に藤田伝三郎、田中市兵衛、土居通夫、広瀬宰平、川崎正蔵など、五代から直接薫陶を受けた企業家たちが関西地方で画期的事業を次々と成し遂げたのは特筆に値しよう。

五代は「洪沢のような「産業の組織者」に徹底することができなかったし、岩崎のように「政商」として財閥を築き上げることもなかった。しかし天下国家を論じ、日本の近代を築く

志にこだわった数少ない事業家であり、偉大な論客であった」と述べ、本書は幕末・維新の時代に革新をもたらした人物であったと結論付ける。西南雄藩の志士たちとともに幕末の長崎で活躍し、近代西洋技術の導入を通じて工業化のリーダーシップを発揮した企業家・五代友厚を知る上で、本書は格好の手引書となるに違いない。これからの時代を担うビジネスマンや学生の皆さんに、本書を一読されることをぜひともお勧めしたい。

（ミネルヴァ書房、2018年12月、xvi+238頁、2,800円＋税）